

エジプト ダハシュール北遺跡調査報告

— 第 23 次発掘調査 —

吉村 作治^{*1}・矢澤 健^{*2}・近藤 二郎^{*3}・柏木 裕之^{*4}
・竹野内 恵太^{*5}・松永 修平^{*6}・山崎 世理愛^{*6}

Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Twenty-third Season

Sakuji YOSHIMURA^{*1}, Ken YAZAWA^{*2}, Jiro KONDO^{*3}, Hiroyuki KASHIWAGI^{*4},
Keita TAKENOUCI^{*5}, Shuhei MATSUNAGA^{*6}, Seria YAMAZAKI^{*6}

Abstract

The expedition of Higashi-Nippon International University, under the direction of Prof. Dr. Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa as a field director, conducted an excavation at Dahshur North in August 2015. Since the last season in April-May 2015, the area located between the New Kingdom tomb-chapels of *Ipay* and *Ta* has been investigated (Fig.1). The excavation of the last season revealed a Ramesside shaft tomb (Shaft 125) surrounded by mud brick wall, and identified several shaft tombs to the north of Shaft 125. In this season, sub-grids (Grid 3E16a, 3E06a, c) to the east of Shaft 125 were excavated, and a new shaft tomb (Shaft 132), a simple pit (R006) burial and an animal burial (R011) were unearthed. Four shaft tombs (Shaft 127, 128, 130, 131) to the north of Shaft 125 were also cleared. It appears that Shaft 127 used to accommodate the Middle Kingdom burial, but it was plundered and remains of the burial equipment were mixed with the New Kingdom objects. On the wall of the shaft there were two holes which lead to the neighbouring tombs, and one of them is Shaft 131. Since Shaft 131 is the Ramesside tomb, it is probable that the New Kingdom objects in Shaft 127 were came from the subterranean chamber of Shaft 131. Shaft 128 has a chamber to the south, which was thoroughly plundered and it remained only a small amount of wooden object, human bones and pot shards. Pot shards contained the typical Middle Kingdom vessels, dated to the first half of the Thirteenth Dynasty. As for Shaft 130, It is notable that the long axis is oriented almost northeast-southwest, which is uncommon in this site. Objects from Shaft 130 were exceptionally scarce, and one of pot shards and a lid of a faience vessel indicate that the chamber was used in the New Kingdom burial. Shaft 131 is a Ramesside tomb, which has subterranean chambers to the east and to the west. The most noteworthy finds were nine complete faience shabtis, two of them were discovered from debris in the shaft and seven of them from the eastern chamber. The owner of the shabtis was *Ptahmenu*. The western chamber, on the other hand, has many pieces of wooden shabtis painted in white with inscription in black. Owner of the wooden shabtis was not clear because of surface deterioration.

* 1 東日本国際大学学長・教授

* 2 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授

* 3 早稲田大学文学学術院教授

* 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

* 5 早稲田大学文学学術院助手

* 6 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* 1 *President, Professor, Higashi Nippon International University*

* 2 *Visiting Associate Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University*

* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University*

* 4 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University*

* 5 *Research Associate, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University*

* 6 *MA Student, Department of Archaeology, Waseda University*

1. はじめに

ダハシュール北遺跡は、衛星リモートセンシングを活用した調査によって1995年に発見された(図1)。その後の発掘調査により、新王国時代の人物「イパイ」、「パシエドゥ」のトゥーム・チャペルの存在が明らかとなり、周囲にも同時代のシャフト墓、土壌墓が散在していることが判明した。2004年からは遺跡の西側に位置する「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に発掘の重点が置かれ、2005年には中王国時代の人物「セヌウ」の墓が手付かずの状態で見つかった。以降、当該地区からは同時代の埋葬が多数発見され、この遺跡が中王国・新王国の両時代で活発に利用された墓地であることが分かってきた¹⁾。

「イパイ」墓と「タ」墓は約90m離れており、それぞれの地区から発見された墓には様々な点で違いがあることが分かっている。例えば、前者では中王国時代の墓は認められていないが、後者には多数存在する。また新王国時代では、前者では墓が比較的大型で、墓の長軸方向は南北のものと東西のものが混在している。一方、後者では比較的小型で、墓の長軸は東西でほぼ統一される。こうした差異をどう評価していくかが、今後の重要な研究課題として認識されるに至った。

前回の第22次調査では両地区のつながりを示す資料の取得を目的に、その中間に当たる場所に発掘区が設定された(図1)。発掘区の中央から日乾煉瓦の周壁を持つシャフト墓が発見され(シャフト125)、地下からは新王国時代第19～20王朝に年代づけられる、大量の木製シャブティを中心とする副葬品が出土した(Yoshimura et al. 2016; 吉村他 2016)。第23次調査ではこの地区での発掘をさらに継続し、シャフト125の北側にある4基のシャフト墓と、周壁東側の地上部の発掘が実施された²⁾。以下にその成果の概要について報告する。

2. 地上部の発掘調査

第22次調査でイパイ墓周辺地区とタ墓周辺地区の間に位置する20 m x 20 mの地区の発掘が実施された結果、南北9.1 m、東西16.8 mの平面がコの字形を呈する日乾煉瓦の壁体が発見された。壁体内側のほぼ中央にシャフト125が見つかったことから、壁体はこのシャフトに付属する施設と推測される。第23次調査では、この東側に隣接する南北15m、東西5mの範囲(グリッド3E06aおよびc、3E16a)で地上部の発掘が実施された(図1)。

グリッド3E16aの北東部で、南北1.9m、東西1.0mのシャフト開口部(シャフト132)が発見された。開口部は日乾煉瓦の枠を有する。同グリッドの南側中央からは人為的な岩盤への掘り込み(R061)が観察された。南北2.0m、東西0.8mの矩形で、深さ0.2mであり、内部には岩盤の掘削廃土であるタフラが詰まっていた。

グリッド3E06cの北西部からは長さ2.3m、幅0.7m、深さ0.5mの土壌墓が発見された(R006、図2左)。長軸はほぼ北東-南西方向、すでに攪乱を受けており、内部からは微小な骨片やマットの一部と思われる植物の破片が発見された。グリッド南部からは矩形の地山への掘り込みが発見された(R046)。東西2.3m、南北1.4m、深さ0.3mであり、その南西コーナー付近からは幅0.7mの細長い掘り込みがシャフト125の日乾煉瓦壁体に向かって伸びていた。壁の下に続いているため、掘り込みの全容は不明である。

グリッド3E06aからは、地山に掘り込まれた土壌墓が発見された(R011、図2右)。南北0.9m、東西0.9m、深さ0.4mであり、内部には日乾煉瓦が不規則に詰められていた。煉瓦の下から、長さ70cm、幅16cmの木棺が発見された(図3)。木棺は東西方向に横たえられており、側面がすでに崩落しているため高さは明らかではない。外面には白色プラスタが塗布されていたと見られ、表面にその残滓が認められ、周囲にも剥落したプラスタ片が散在していた。内部の残存状況は悪く、骨は細片状で判別が難しい状況だったが、歯

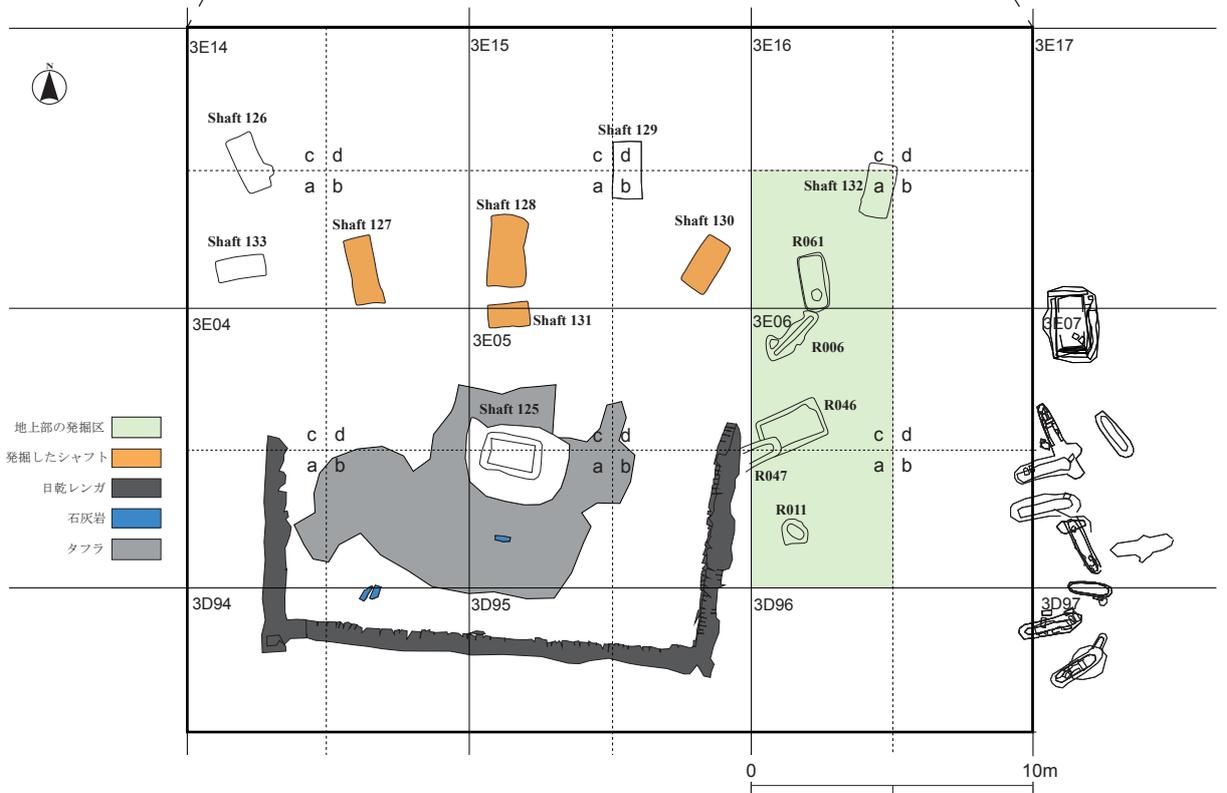
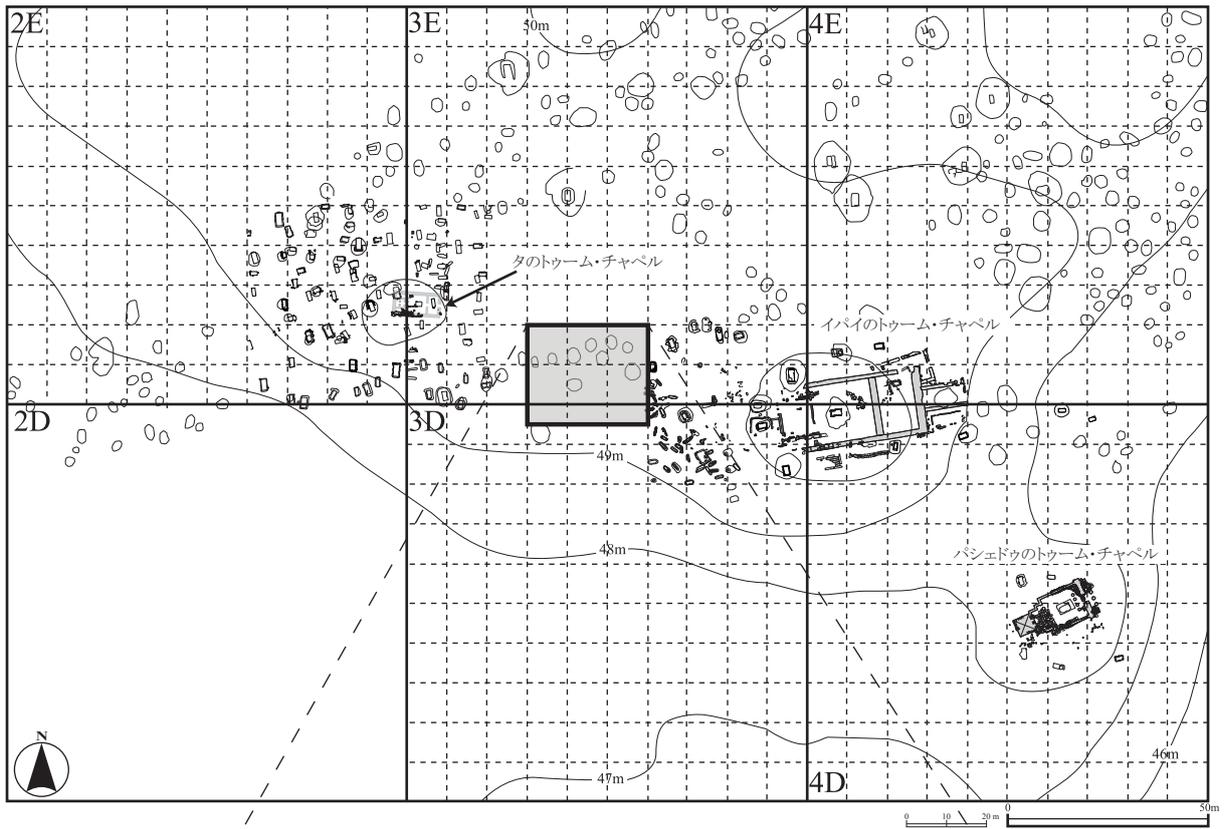


図1 ダハシュール北遺跡の地図と2015年発掘区
 Fig.1 Map of Dahshur North and excavated area in 2015

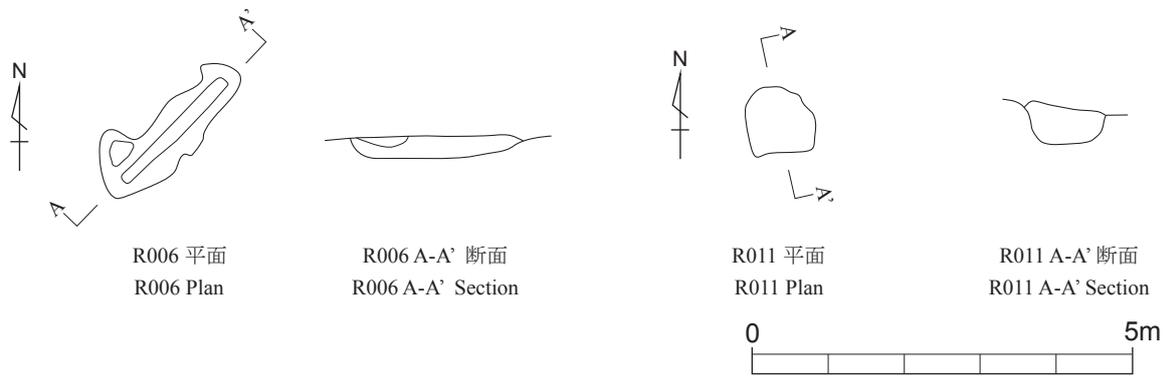


図2 土壙墓の平面・断面図
Fig.2 Plan and section of pit burials



図3 土壙墓 R011 出土木棺
Fig.3 Wooden coffin in pit burial R011

と思われる断片は鋭く、明らかに人間のものとは異なっていた。棺の大きさや歯の特徴からみて、何らかの小動物の埋葬と推測される。

シャフト 127 の発掘中、シャフト部西壁に別の墓の地下室に続く開口部が発見され、西側に墓があることが判明した。3E14a の地上部を精査した結果、前回の発掘では特定されていなかったシャフト開口部が確認され、シャフト 133 として番号が与えられた。

3. シャフト墓の発掘調査

(1) シャフト 127

①遺構の概要 (図4)

シャフト 127はグリッド 3E14b に位置し、前回の第22次調査で開口部が発見されていた。開口部の平面は南北2.5m、東西1.0m、シャフト部の深さは7.2mであった。シャフト部の西壁には深さ2.2mのレベルが

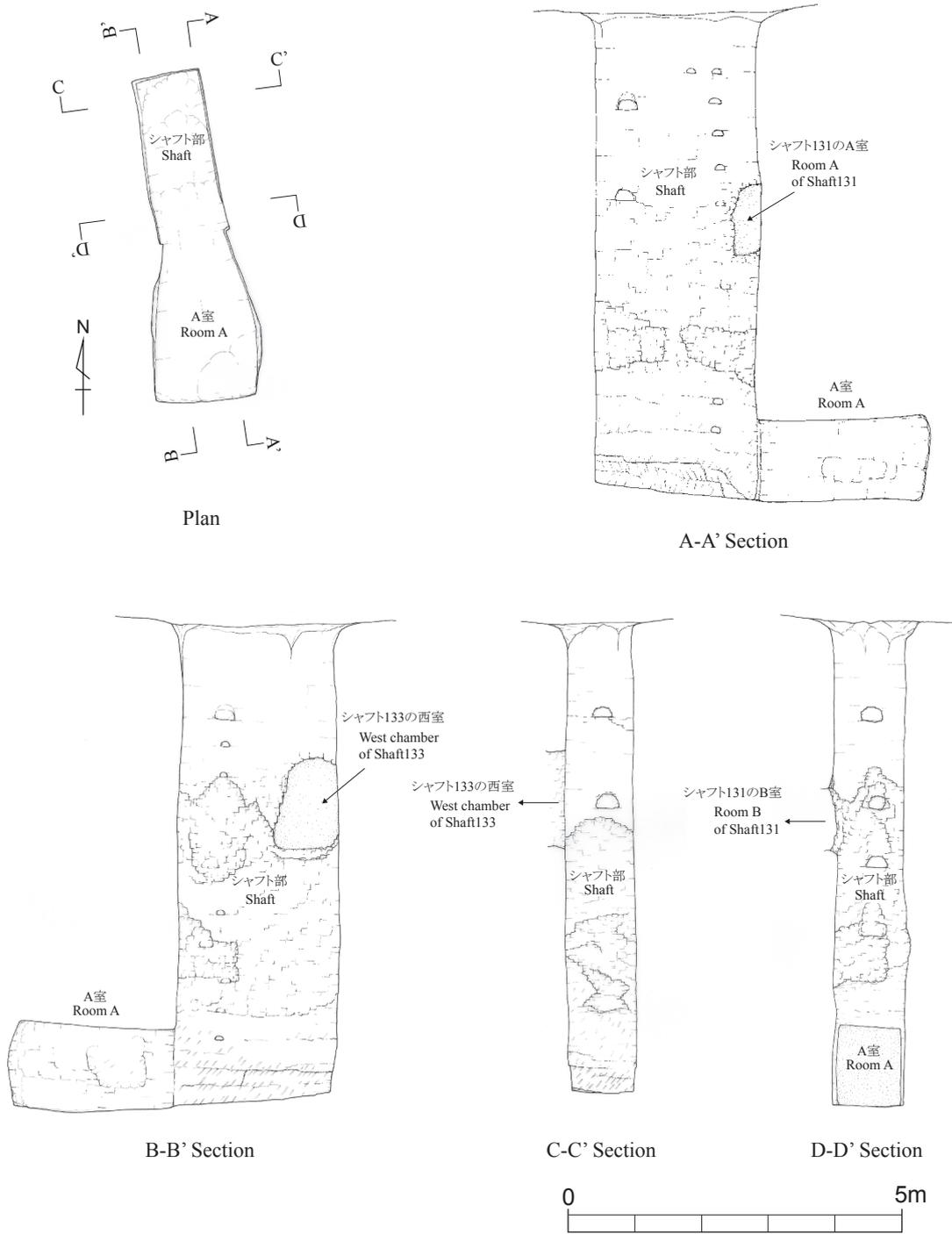


図4 シャフト 127 平面・断面図
Fig.4 Plan and section of Shaft 127

らシャフト 133 の地下室への開口部が発見された。また、シャフト部東壁には深さ 2.7m のところからシャフト 131A 室へとつながる開口部があった。シャフトの最下部から南側に部屋が発見された (A 室)。A 室の平面は南北が 2.5m で入口側の東西が 1.0m、奥側の東西が 1.6m で台形に近く、天井高は 1.2m であった。

墓はすでに盗掘を受けており、シャフト部および A 室からは人骨、土器片、ビーズ、木製シャブティ、木棺片などが発見された。A 室の堆積には日乾煉瓦が含まれており、副葬品に由来すると推測される金箔片が A 室から出土した。シャフト 127 の形状はこの遺跡の中王国時代の典型だが、出土遺物は中王国時代と新王国時代のもものが混在していた。接触していたシャフト 131 は新王国時代のラムセス王朝期に年代付けられることから、シャフト 127 は本来中王国時代の墓で、後にシャフト 131 と繋がったことで、新王国時代の副葬品が流入したと考えられる。シャフト 131 出土の土器の中には、シャフト 127 から出土した土器片と接合したのがあることや、同様の特徴を持つビーズ、木製シャブティがシャフト 131A 室から出土していることも、この推測を裏付けている。

②出土遺物

a) 土器 (図 5)

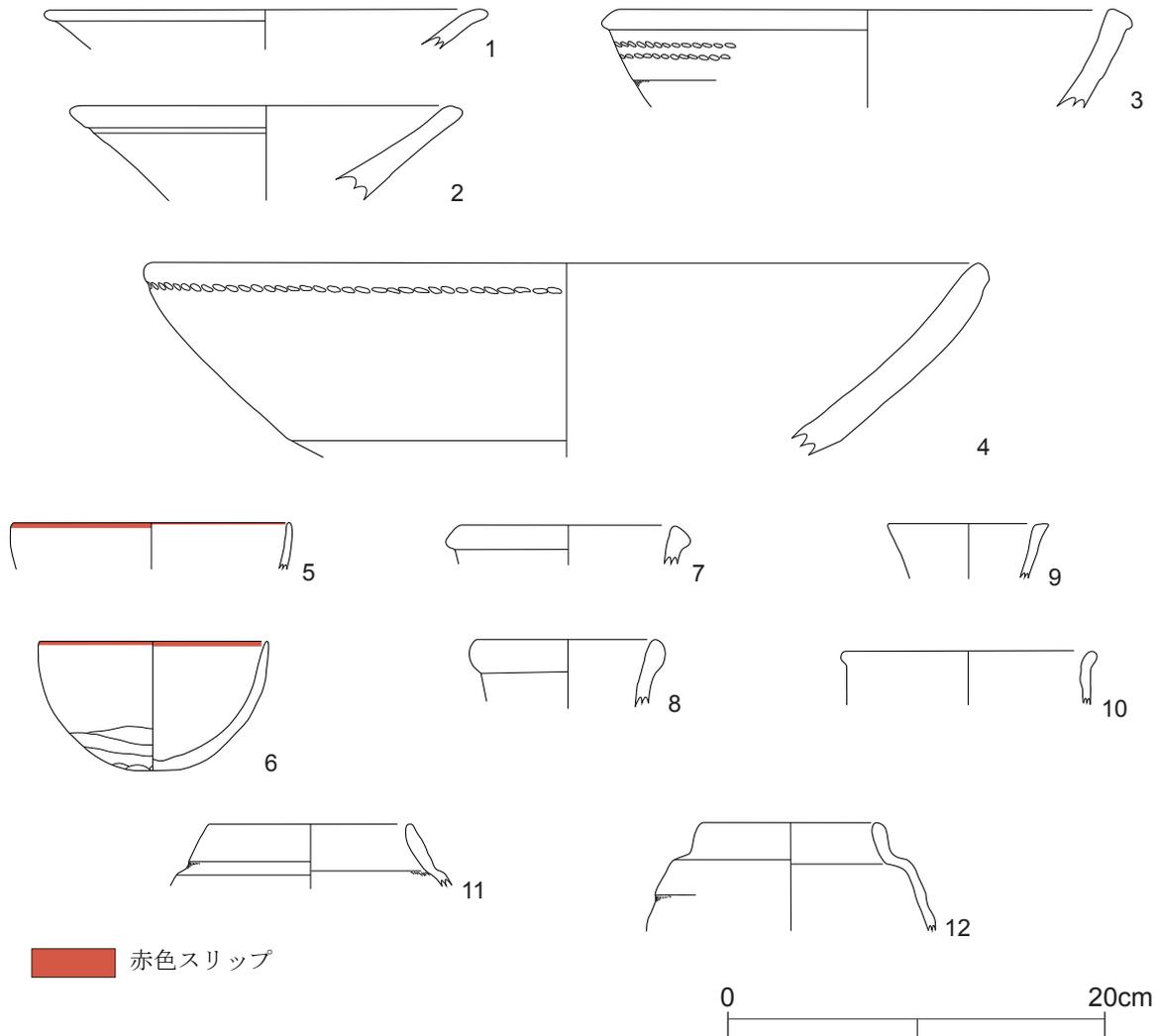


図5 シャフト 127 出土土器
Fig.5 Pottery vessels from Shaft 127

図5³⁾に示された土器の内、図5.5～5.8は典型的な中王国時代の器形であり、図5.5、5.6は胎土が Nile B1⁴⁾で薄手の半球形の碗であり、口縁に赤色スリップが塗布されていた。図5.6のベッセル・インデックス(最大径 / 器高 x 100)は約176を示し、第12王朝末から第13王朝初期に年代付けられる(Arnold 1988: 140; Schiestl and Seiler 2012: 84-87, Group 3)。図5.7、5.8は中王国時代に典型的な Nile C の大型丸底壺の口縁部と推測される(Schiestl and Seiler 2012: 640-643)。一方図5.11、5.12は新王国時代で、ビール壺としばしば呼ばれている器形の口縁部断片である。口縁部が図のように内側に傾斜する器形は第19王朝後半から第20王朝に多い(Aston 2011: 217-221)。

b) ビーズ (図6)

図6.1～6.3はシャフト部から発見された渦巻き状の文様を持つアイ・ビーズ (eye-bead) と呼ばれるもので、新王国時代以降に年代付けられている(Brunton and Engelbach 1927: Pl.XLIII.58A-E; Raven 1991: 42, Cats.57, 81; Raven 2001: Cat.286-288; Raven et al. 2011: 98, Cat.78a-b, 79, 80, 328)。同様のビーズはシャフト131のA室からも発見されており(図17.1)、シャフト127の埋葬に属するものではなく、シャフト131から流れ込んだ遺物と推測される。図6.4～6.6はシャフト部から発見された球形ビーズであり、6.4と6.5はラピスラズリ製、6.6はヒスイ製である。図6.7はA室から発見されたラピスラズリ製の球形ビーズで、青銅の小片とともに人骨が集中していた箇所から発見された。

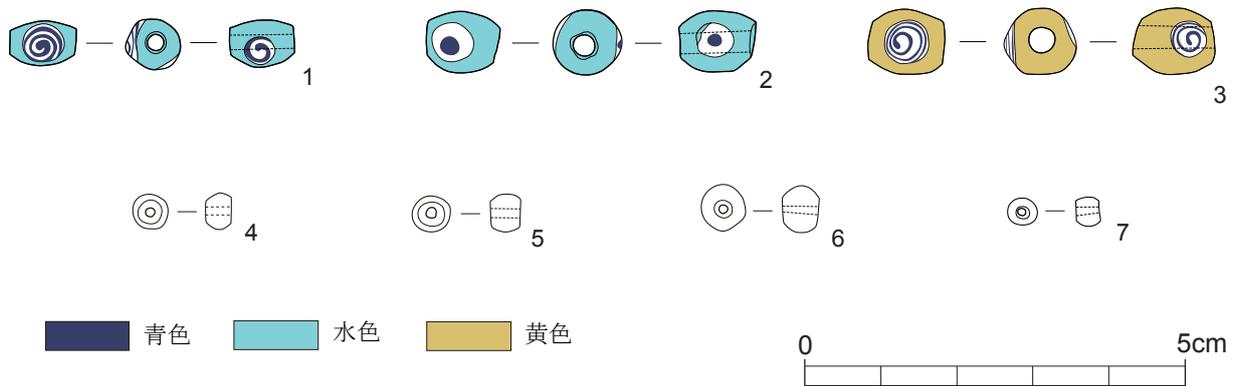


図6 シャフト127出土ビーズ
Fig.6 Beads from Shaft 127

c) 木製品 (図7)

図7.1は「イシスの結び目」を象った木製品であり、シャフト部から発見された。新王国時代の人型木棺はアミュレットを象ったものを手に持つ姿で表現された例が多くあり(Niwinski 1988: 12)、この断片もおそらく新王国時代の人型木棺の一部で、シャフト131に由来すると推測される。図7.2は木製シャブティの胴部で、全面が白色に塗られており、黒色の碑文の痕跡が認められた。碑文の内容は残存状況が悪く判別できないが、同様の特徴を持つ木製シャブティはシャフト131A室から出土しており(図14)、こちらもシャフト131A室の埋葬に属する副葬品と考えられる。

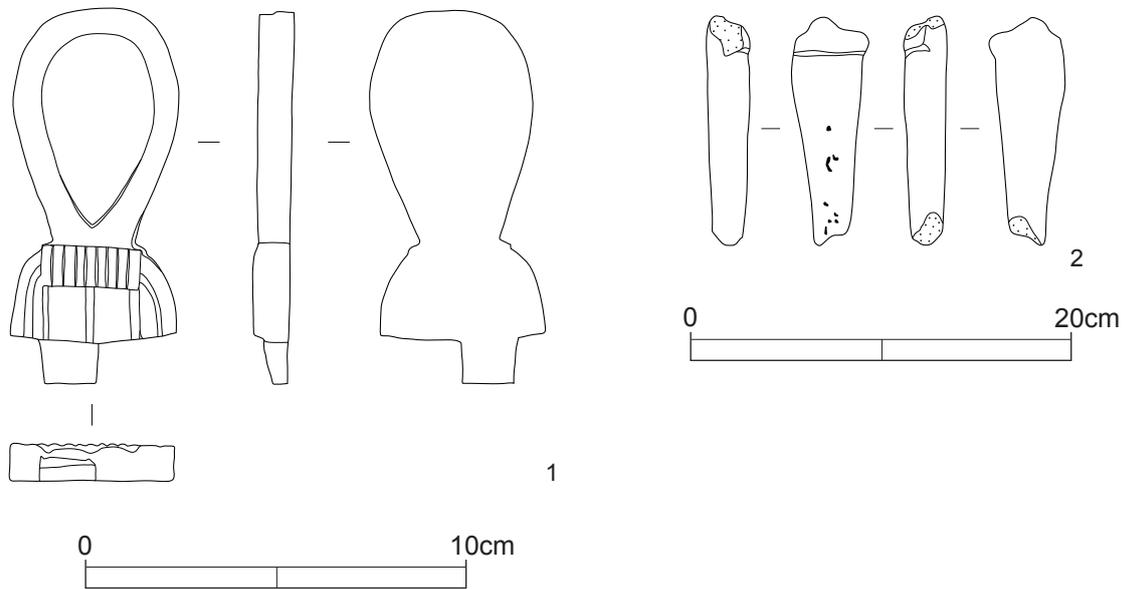


図7 シャフト127 出土木製品
Fig.7 Wooden objects from Shaft 127

(2) シャフト 128

①遺構の概要 (図8)

シャフト128はグリッド3E15aに位置し、前回の第22次調査で開口部が発見されていた。開口部の平面は南北2.6m、東西1.3m、シャフト部の深さは7.4mであった。深さ3.4mのところから北側に開口部があり、隣接するシャフト墓の地下室と繋がっていた。深さ5.3mのところから南側に部屋が発見された(A室)。シャフト最下部は北側が一段高くなっており、南側が低く、南端はA室の床面から1.1m低い。シャフト最下部の南面には矩形の掘り残しが認められた。矩形部分は周囲よりも一段高く、粗く削られており、その周囲は比較的丁寧に仕上げられていた。

墓は盗掘を受けており、残存していたのは土器片と骨、わずかな木片だけであった。

②出土遺物

土器 (図9)

図9.5のみシャフト部出土であり、それ以外は全てA室から出土した⁵⁾。中王国時代に典型的な器形が多く、図9.3は高台付皿 (Schiestl and Seiler 2012: 350-366) の、高台部と考えられる。図9.4は薄手の半球形碗の口縁で、上部に赤色スリップが見られる。図9.6は大型丸底壺であり、全体的に細身で頸部が細長いことや、口縁部の形状からR. シストルとA. ザイラーによる分類のClass 6aに相当すると考えられ、第13王朝前半に年代付けられる (Schiestl and Seiler 2012: 674-678)。

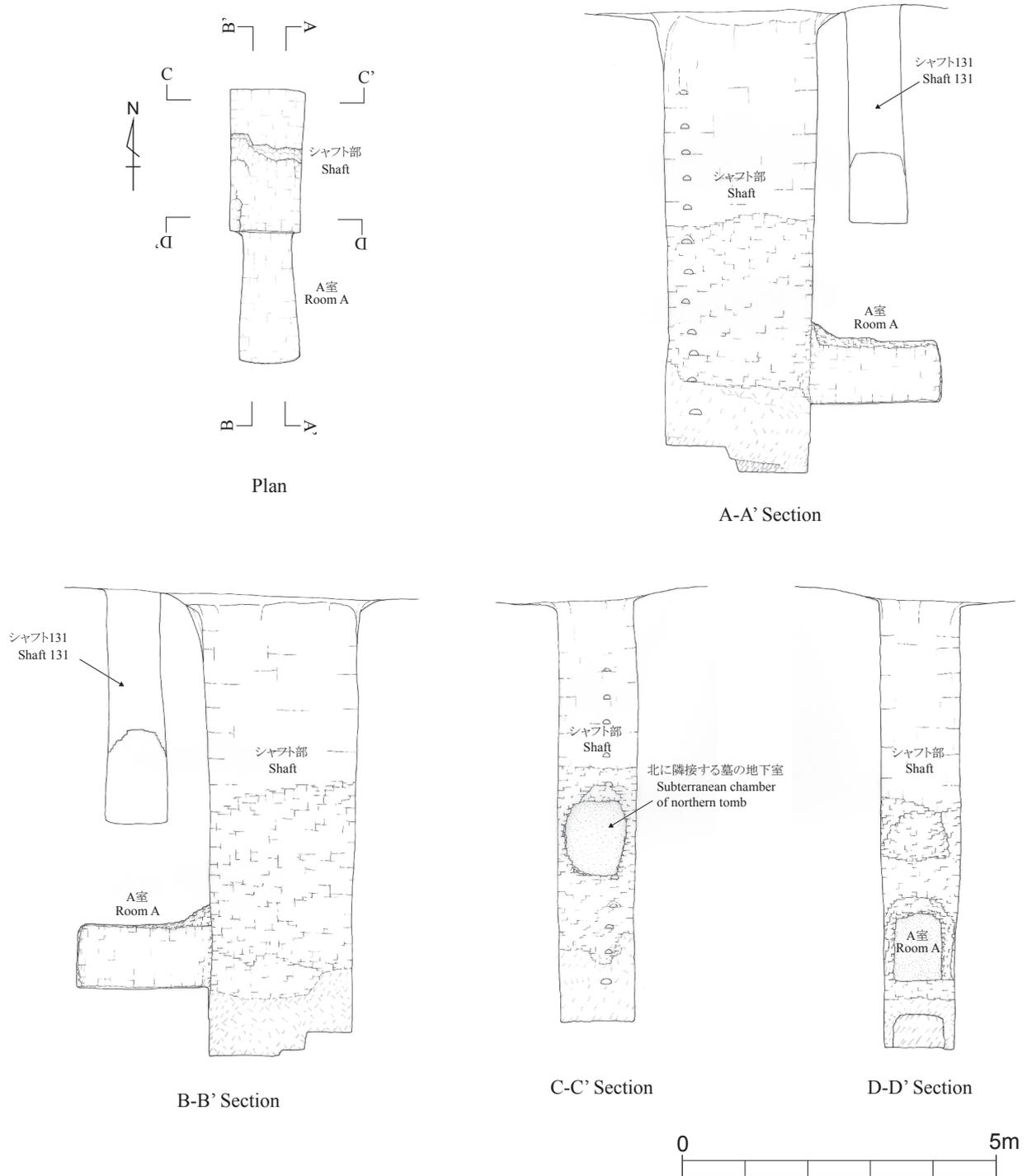


図8 シャフト128平面・断面図
Fig.8 Plan and section of Shaft 128

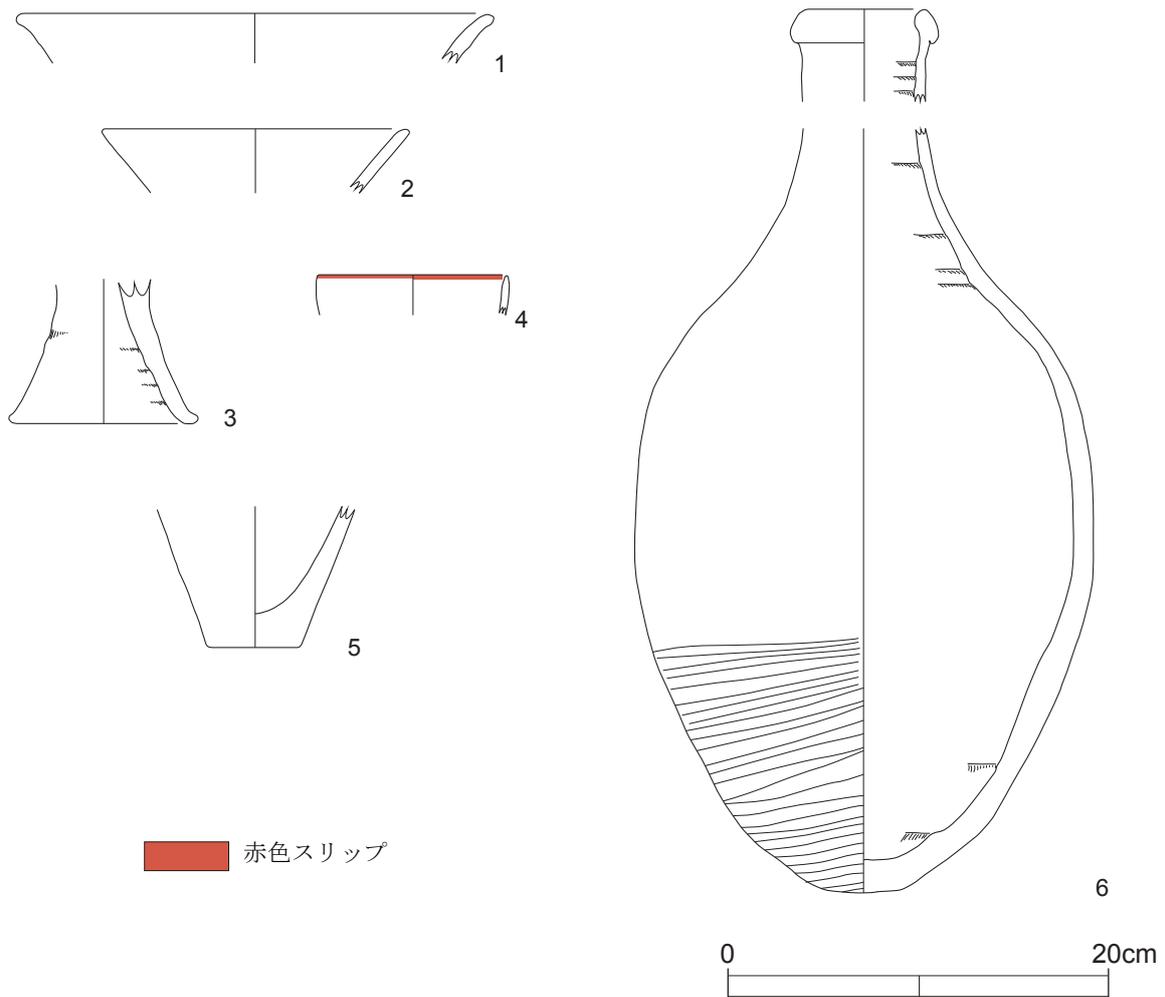


図9 シャフト128出土土器
Fig.9 Pottery vessels from Shaft 128

(3) シャフト130

①遺構の概要 (図10)

シャフト130はグリッド3E15bに位置し、前回の第22次調査で開口部が発見されていた。開口部の平面は南北1.9m、東西0.9m、シャフト部の深さは4.5mであった。開口部平面の長軸は北東-南西方向に近い。この遺跡で長軸方向が南北に近いシャフト墓は、南北軸に沿うか、やや反時計方向に振れていることが多いため(矢澤、吉村 2016: 11, 図5)、シャフト130のような例は稀である。この場所は岩盤上にある礫を多く含む赤褐色の地山の層が厚く、開口部にはその崩落を防ぐためと考えられる日乾煉瓦の擁壁の一部が残存していた。

シャフト部のほぼ最下部から南に部屋が掘削されていた(A室)。A室の平面は南北が2.6m、東西が1.9mの矩形で、天井の崩落が激しいが最奥部で確認された高さは0.9mである。A室の開口部には石灰岩製の脇柱が両端にあり、西側のものは下部のみが残存していた。A室の北側にはシャフト部とほぼ同じ幅で20cmほど掘り下げられた部分があった。

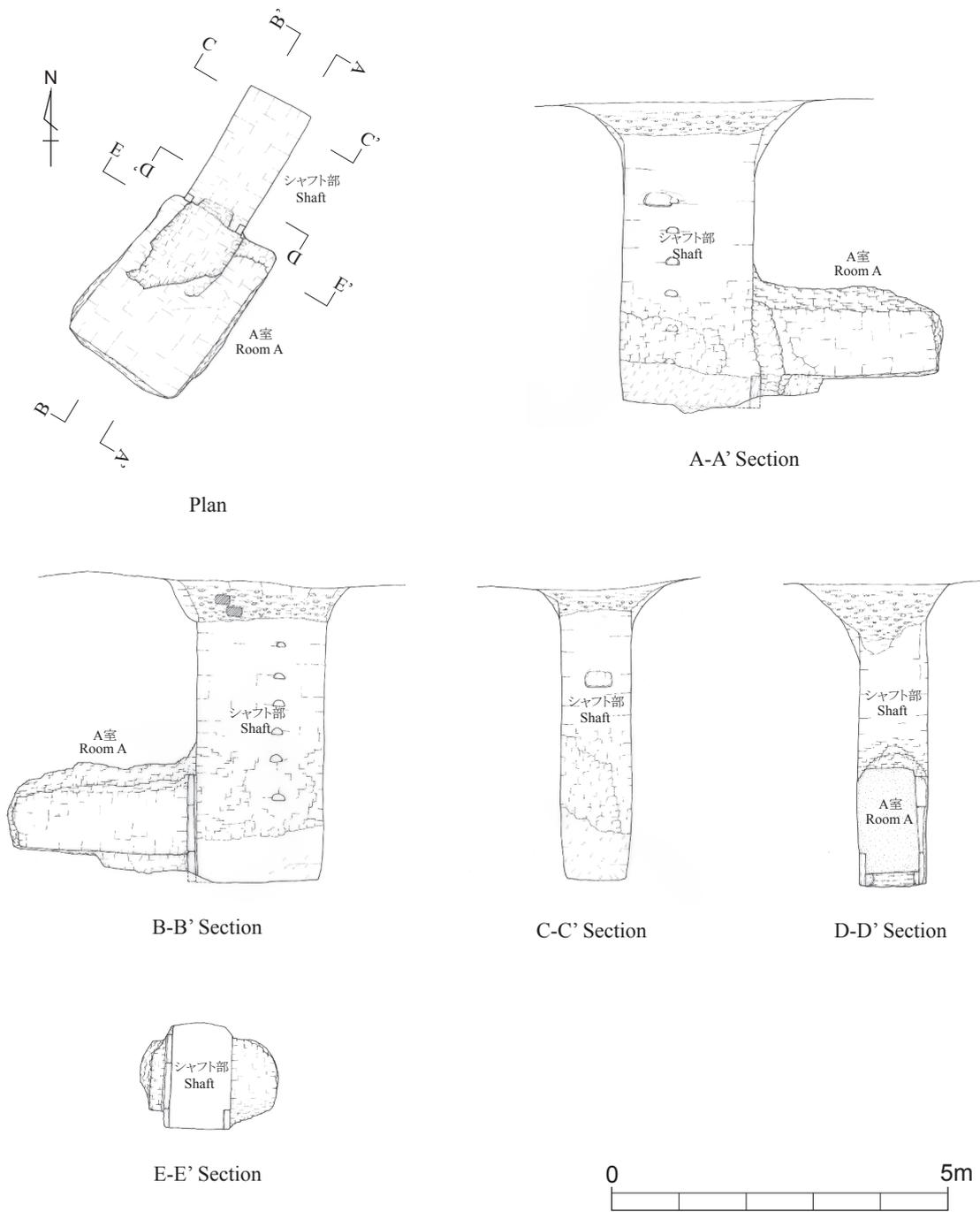


図10 シャフト130平面・断面図
Fig.10 Plan and section of Shaft 130

遺物はファイアンス容器片と土器片、骨片、木片が少量出土したのみで、極めて少ない。巡礼壺の断片の存在や、第19王朝に類例が認められるファイアンス製容器蓋の存在から、新王国時代に埋葬が行われていた可能性がある。

②遺物 (図11)

土器の多くは磨耗しており、比較的状态の良かったものはA室から出土した壺の口縁部片(図11.1)と巡礼壺の断片(図11.2)である。巡礼壺は第18王朝中期頃からエジプトで見られる(Holthoer 1977: 99)。胎土は非常に密で、明るい褐色(2.5YR6/6)を呈し、白色粒を極少量含んでおり、エジプトの在地の胎土とは異なる可能性がある。図11.3はファイアンス製容器の蓋の断片であり、上面には黒色でロータスの花の模様が描かれていた。類似する例が、このシャフトの南東約12mに位置するシャフト32からも出土していた(Yoshimura et al. 2001: 10, Pl.31)。石灰岩製の同じ形状・模様を持つ例がサッカラのイウルデフ墓から出土しており、第19王朝に年代付けられている(Raven 1991: 36, Cats.9, 10)。

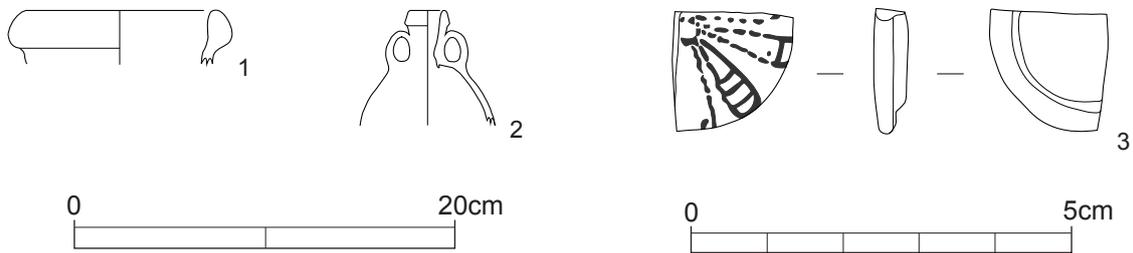


図11 シャフト130出土遺物
Fig.11 Objects from Shaft 130

(4) シャフト131

①遺構の概要(図12)

シャフト131はグリッド3E05cに位置し、前回の第22次調査で開口部が発見されていた。開口部の平面は南北0.9m、東西1.6m、シャフト部の深さは3.5mであった。シャフト上部には多いところで5段に及ぶ日乾煉瓦の囲いが見られ、側面にモルタルが塗布されていた痕跡がある。

シャフト最下部から西側と東側に部屋が発見された(それぞれA室、B室)。A室の平面は南北3.1m、東西3.3mの矩形で、天井は大きく崩落しているが本来の天井高は約1.1mだったと推測される。A室の西面北側にはシャフト127シャフト部へ続く開口部があり、その開口部を挟むような形で2点の石灰岩ブロックが床面直上で置かれていた(図13)。

東側のB室の平面は台形状で、奥行(東西)は2.7m、西壁の南北は2.2mに対し東壁の南北は2.6mあり、天井高は1.0mであった。B室の北壁には横幅120cm、高さ40cm、奥行20cmほどの窪みがある。B室の北西コーナーはわずかにシャフト128のシャフト部と接しており、小さな開口部があった。

シャフト部の地下室開口部のレベルから比較的良好な状態の遺体が発見された。人骨は骨盤から足までの骨があり、仰臥で骨盤側が東、足側が西を向く方向で出土しており、表面にはミイラ布が一部残存していた。また、同レベルのシャフト部南際からは、石灰岩製供物卓が1点出土した。さらに、シャフト部の床面付近、B室の入口に近い場所で完形のファイアンス製シャブティが2体発見された。

B室からは完形のファイアンス製シャブティが7体発見され、内6体は部屋の北東コーナー付近からまともに出土した。一方A室からはファイアンス製のシャブティが1点も出土せず、木製のシャブティだけ

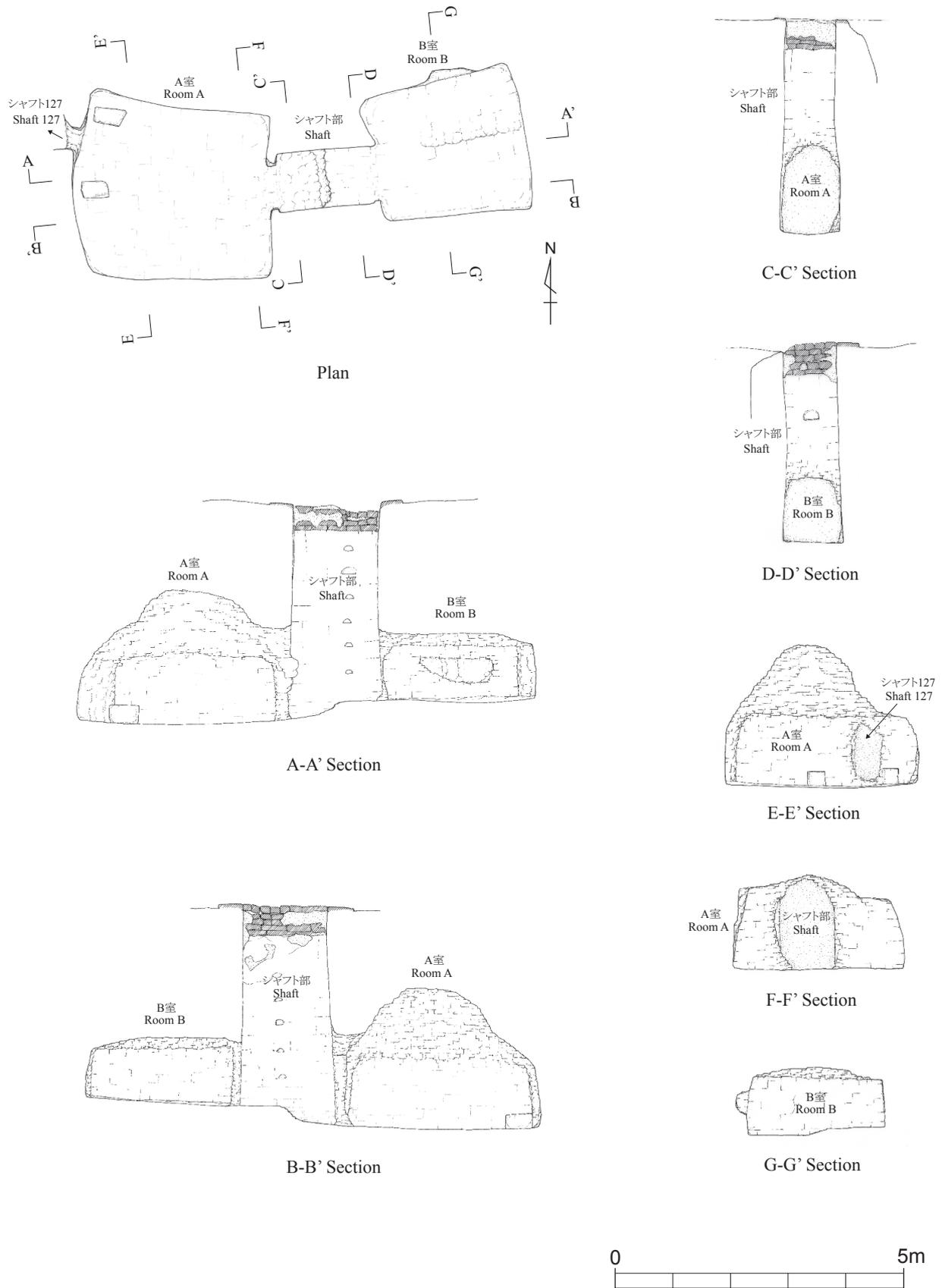


図12 シャフト131平面・断面図
Fig.12 Plan and section of Shaft 131



図13 シャフト131A室完掘後状況(東から)
Fig.13 Room A of Shaft 131 after being cleared, looking from east

が発見されており2つの部屋で明確に出土傾向が異なることが注目される。ただし、土器はA室とB室の断片が接合するものが複数見られた。その他、木棺片、ビーズ、石製品片、彩色付プラスタール片などが出土した。遺物の年代は第19王朝から第20王朝にかけて類例が認められる。

②遺物

a) ファイアンス製シャブティ(図14)

9体のファイアンス製シャブティが発見されており、全て「プタハメヌウ」という人物に属する。緑がかった青色のファイアンスで、黒色で碑文や細部の図像が表現されている。腕は交差され、両手に鍬を持ち、正面下半には1行の碑文がある。碑文は全て「オシリス プタハメヌウ 声正しき者」と書かれていた。図14.1、2、3、4、7、8は籠を背負っており、図14.9のみキルトをまとった着衣形である。全体が比較的薄く、背面が平坦であるという特徴があり、同様のシャブティは第20王朝に類例が認められる(Schneider 1977: 3.3.1.3, 3.3.1.4)⁶⁾。また、9体全ての大きさ・形は似通っており⁷⁾、これらが1つの型からつくられた可能性が指摘される。

b) 木製シャブティ(図15)

木製シャブティは全てA室から出土した。表面には白色の顔料が残存しているものが多く、本来は全身が白色に塗られていたと考えられる。黒色で細部の図や碑文が描かれているが、残りが悪く碑文の内容も不明瞭である。シャフト127シャフト部から発見された木製シャブティ(図7.2)は同じ特徴を有し、本来はシャフト131A室にあったと考えられる。図15.7のみ着衣形である。

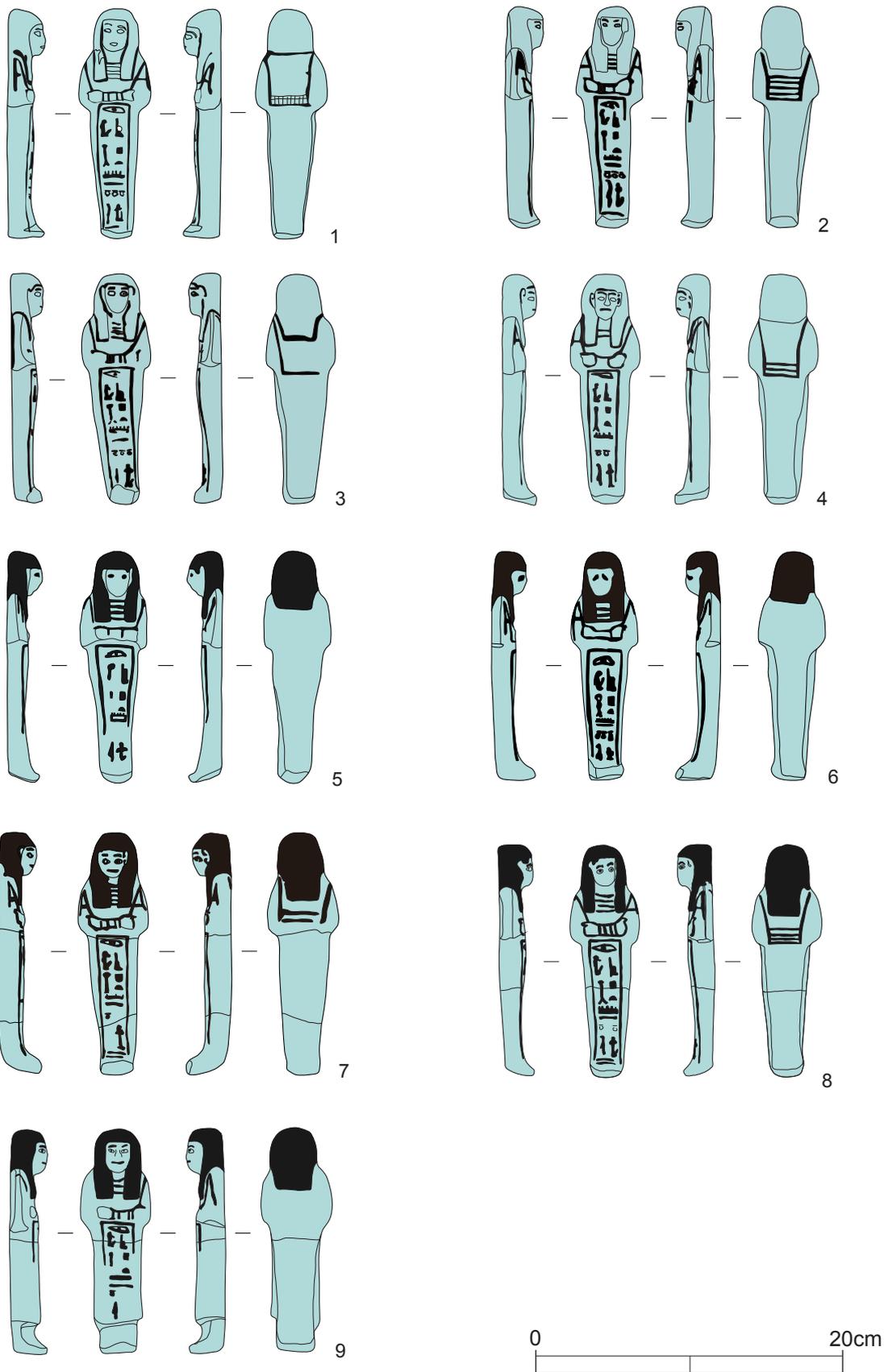


図 14 シャフト 131 シャフト部および B 室出土ファイアンス製シャブティ

Fig.14 Faience shabtis from shaft filling and Room B of Shaft 131

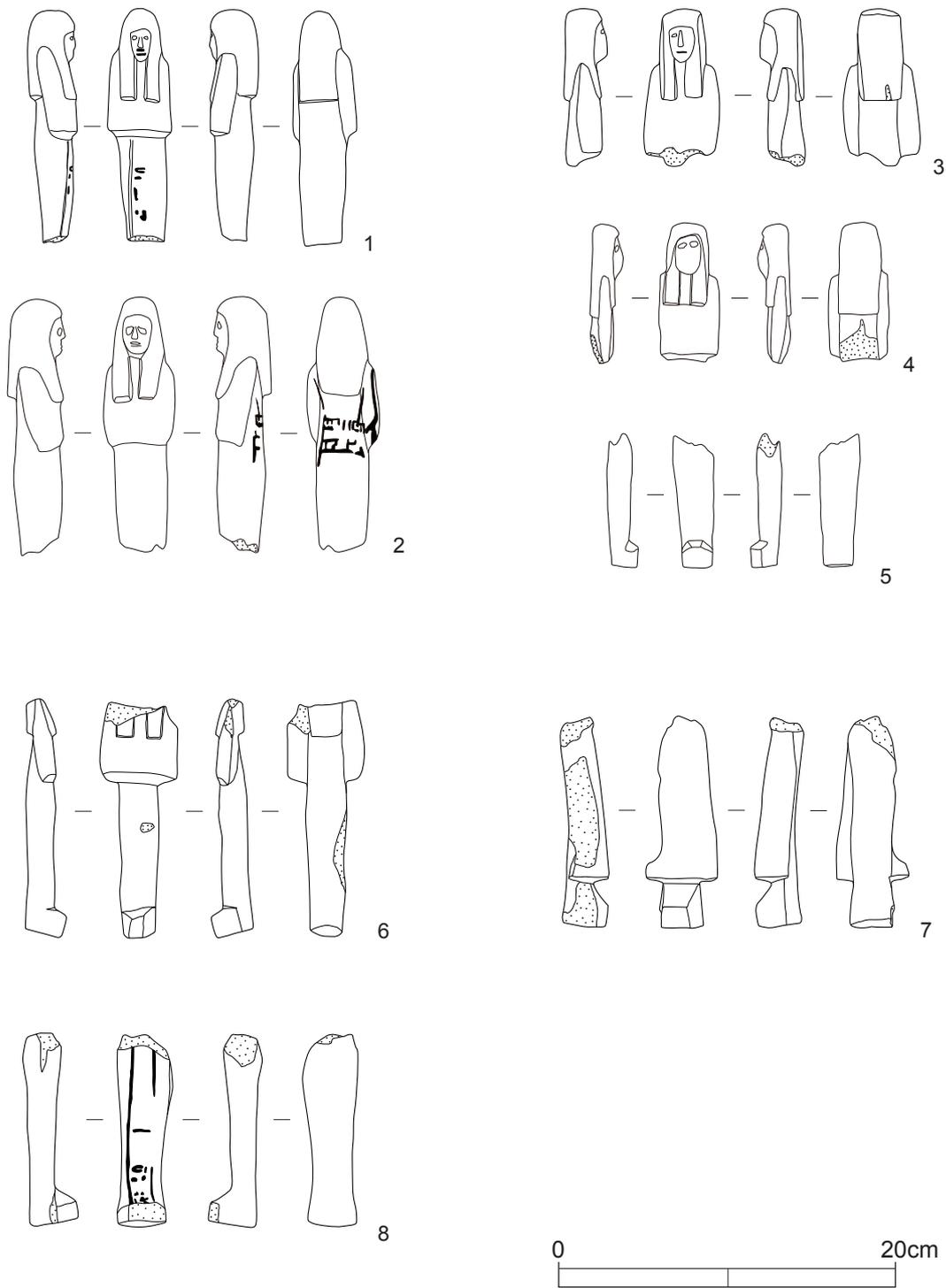


図15 シャフト131 A室出土木製シャブティ

Fig.15 Wooden shabtis from Room A of Shaft 131

c) 石灰岩製供物卓 (図16)

平面は41cm x 38.5cm、厚さは8cmであり中央部が大きく窪んでいる。側面の1つは凸状に突き出ており、液体物を流すための溝が設けられている。平面が矩形を呈し、凸状の突起を持つ供物卓の例は、サッカラのホルエムヘブ墓からも出土している。この例は、ラムセス王朝期のものである可能性が指摘されている (Martin 1989: 110, Pl.173)。

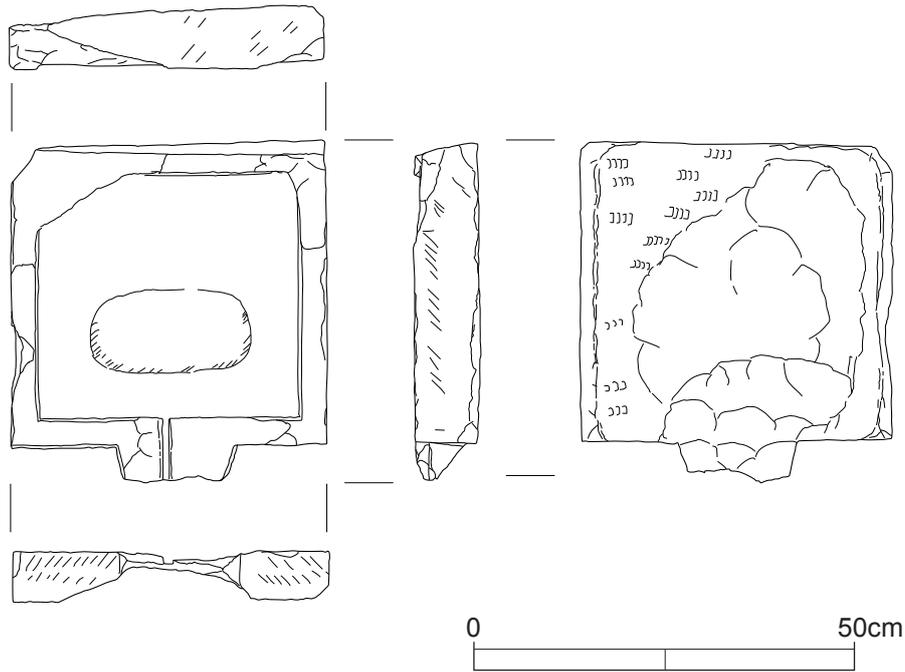


図16 シャフト131 シャフト部出土石灰岩製供物卓
Fig.16 Limestone offering table from shaft filling of Shaft 131

d) ビーズ (図17)

図17.1はシャフト127の出土遺物にあったガラス製のアイ・ビーズと同様のものである。シャフト127出土の3点(図6.1~6.3)も本来はシャフト131A室の埋葬に使用されていたものと推測される。その他は青色ファヤンス製のビーズで図17.2、3はA室、図17.4はB室より出土した。

e) 土器 (図18、19)⁸⁾

土器は新王国時代の「ビール壺」の断片が数多く含まれており、口縁はどれも内側に傾斜していた。B. アストンの研究によれば、こうした特徴を持つビール壺は第19王朝後半から第20王朝に年代付けられる(Aston 2011: 217-221)。ピーカー形の青色彩文土器(図19.8)は第19王朝に見られ(Aston 2012: 148-149)、このタイプの青色彩文土器は第20王朝には見受けられない⁹⁾。図18.3、18.6、19.2、19.4は隣接するシャフト127から出土した断片と接合した。

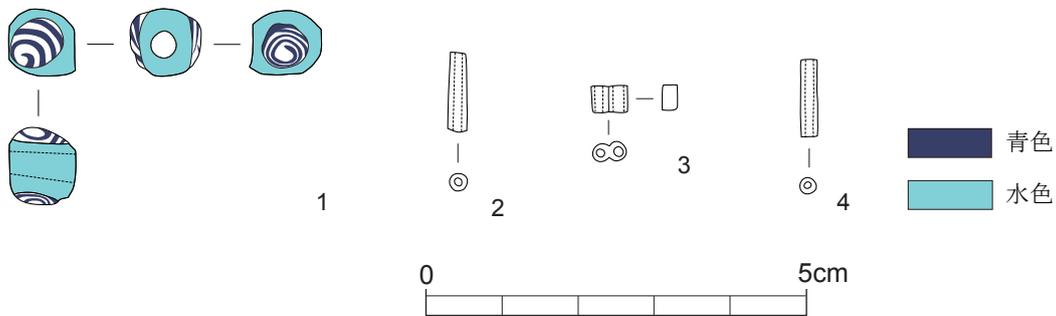


図17 シャフト131出土ビーズ
Fig.17 Beads from Shaft 131

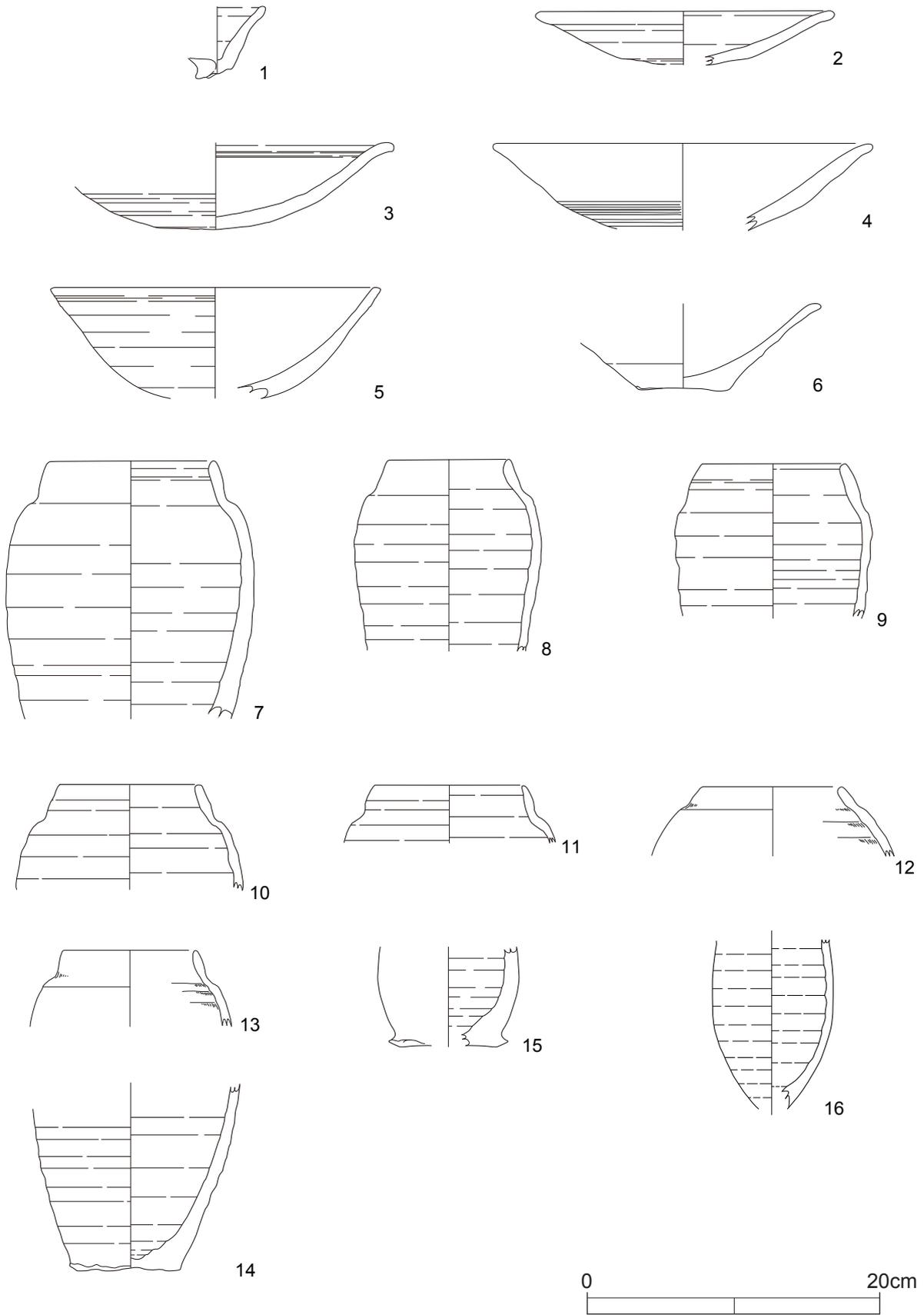


図18 シャフト131出土土器(1)
 Fig.18 Pottery vessels from Shaft 131 (1)

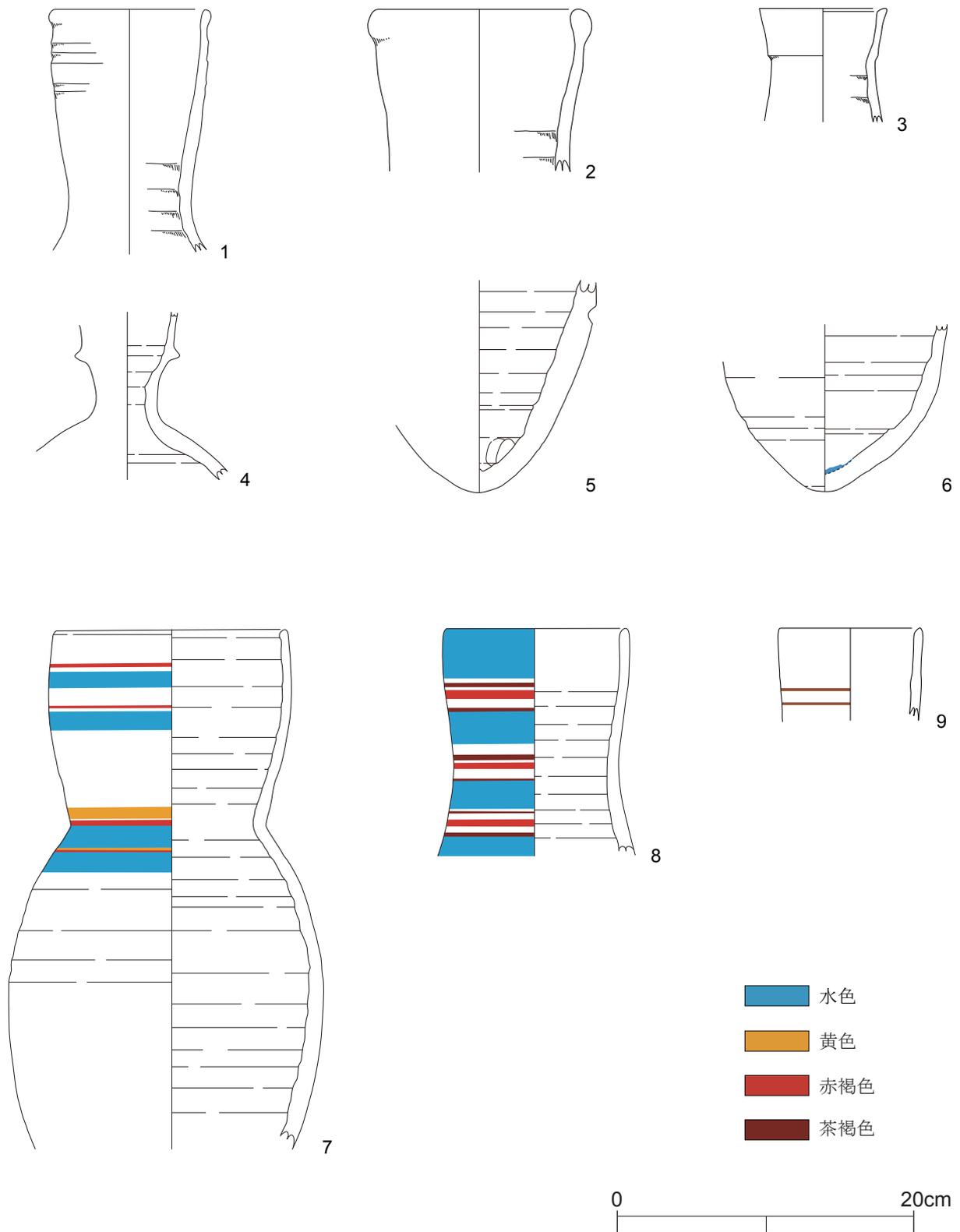


図19 シャフト131出土土器(2)
Fig.19 Pottery vessels from Shaft 131 (2)

4. おわりに

第22、23次の2回に渡って、イパイ墓周辺と夕墓周辺の間にある地区で発掘が行われた。以下に、その結果得られた知見について、中王国と新王国の2つの時代に分けてまとめる。

中王国時代の墓は夕墓周辺の発掘によって初めて発見され、未盗掘を含め数多くの墓が調査された結果、この遺跡における同時代の墓の典型が分かってきた。この典型に照らしてみれば、シャフト127、128は紛れもなく中王国時代の墓であると判断される。過去にイパイ墓やパシェドゥ墓周辺を発掘している際にも、この典型に類似する遺構はいくつか発見されていた。しかし、新王国時代の墓に比べ埋葬室が小さく遺物も僅少であるため、これらの遺構は「未完成」と判断されていた¹⁰⁾。今回の調査で夕墓周辺地区より東の地点でも中王国時代の墓は続いていることが明らかとなり、過去に「未完成」とされていた墓も実は盗掘を受けた中王国時代の墓であった可能性がある。すなわち、中王国時代の墓域は遺跡の西側にとどまらず、イパイ墓・夕墓周辺を含む東側にも広がっていたと推測される。今後、過去の出土遺物を再検討しつつ、遺跡の東側でも新たな発掘を実施することが望まれる。

今期発掘したシャフト131はシャフト125から北にわずか5mのところであり、並んでいるようにも見受けられる。ラムセス朝期に年代づけられるシャフト125からは、黒色で全面が覆われ黄色で図像・碑文が描かれた副葬品が顕著に見られたが、シャフト131からはこうした副葬品は見られなかった。また、俯瞰してみるならば、シャフト125、131はイパイ墓周辺と夕墓周辺地区の間にあるものの、その中間的な様相を示すわけではない。シャフト125は夕墓北側で発見された第20王朝のシャフト110と類似していることが過去の報告で述べられているが(吉村他 2016: 108-110)、これらの墓の間は同じ時期・特徴を有する墓で占められるわけではなく、より古い様相を示す例¹¹⁾も存在している。時期・特徴の近い墓が地点ごとに集まっているというよりは、異なるものが入り混じっている印象を受ける。少なくとも、新王国時代の墓地が単一の方角に向かって漸次的に発展していったわけではなく、もっと複雑な過程を経ていた可能性が考えられる。また、追葬や再利用によって1つの墓が長期間利用されている場合もあり、それが状況をさらに複雑にしている。こうした現状を打開していくためには、地道な遺構・遺物の編年研究の進展が求められる。

謝辞

本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」(研究代表者: 吉村作治、課題番号: 26257010)の助成を受けて実施された。エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーリッド・アル＝エナニー閣下(博士)、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマイル博士、サッカラ査察局長アラ・アル＝シャハータ氏、同副局長サブリ・ファラグ氏、チーフ・インスペクターのムハンマド・ユーセフ氏およびハムディ・アミン氏、サッカラのセリーム・ハッサン遺物収蔵庫の館長ラガブ・トゥルキ氏、第23次調査の査察官サラーハ・スレイマン・アッタティア氏に多大なご支援、ご協力をいただいた(肩書きは調査時のもの)。

ここに記して感謝の意を表したい。

註

- 1) リモートセンシングを応用したダハシュール北遺跡の発見については早稲田大学エジプト学研究所 2003を参照。第1次から第13次調査にかけての発掘調査の概要と文献については吉村 2011にまとめられている。以降の調査は、第14次(吉村、近藤、長谷川他 2011)、第15次(吉村、近藤、矢澤他 2011)、第16・17次(吉村他 2012)、第18次(吉村他 2013)、第19次(吉村他 2014)、第22次(吉村他 2016)となっている。また第23次調査の英文の短報がすでに報告されている(Yoshimura et al. 2016)。第20・21次は倉庫における遺物整理

調査であったため、概要報告はない。中王国時代の埋葬については Baba and Yoshimura 2010, 2011、Baba 2014、Baba and Yazawa 2015 にまとめられている。

- 2) 第23次調査の隊員構成は次の通りである。隊長:吉村作治、現場主任:矢澤健、考古学班:近藤二郎、竹野内恵太、山崎世理愛、松永修平、有村元春、建築学班:柏木裕之、広報:岩出まゆみ、渉外:吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 3) 図5に記載された土器の出土位置、胎土は次の通り。1:シャフト部出土、Marl D、2:シャフト部出土、Nile C、3:シャフト部出土、Nile C、4:シャフト部出土、Nile C、5:シャフト部出土、Nile B1、6:シャフト部出土とA室出土断片の接合、Nile B1、7:A室出土、Nile C、8:A室出土、Nile C、9:シャフト部出土、Nile B2、10:シャフト部出土、Marl D、11:シャフト部出土、Nile B2、12:シャフト部出土、Nile B2。
- 4) 胎土の分類はウィーン・システムを参照している (Nordström and Bourriau 1993: 168-182)。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。
- 5) 図9に掲載された土器の胎土は次の通り。1: Nile C、2: Nile B2、3: Nile C、4: Nile B2、5: Nile B2、6: Nile C。
- 6) H. シュナイダーによる分類記号での表記は Cl.VB4/W4 H24 I5 B12a A0 Tp7c/P。
- 7) 各個体のサイズは次の通り。図 14.1: 15.2 x 4.7 x 2.5 cm、図 14.2: 14.7 x 4.5 x 2.5 cm、図 14.3: 15.2 x 4.6 x 2.2 cm、図 14.4: 15.2 x 4.7 x 2.4 cm、図 14.5: 15.2 x 4.5 x 2.4 cm、図 14.6: 15.0 x 4.5 x 2.8 cm、図 14.7: 16.0 x 4.7 x 2.8 cm、図 14.8: 15.3 x 4.6 x 2.4 cm、図 14.9: 14.9 x 4.7 x 2.6 cm。
- 8) 図18に掲載された土器の出土位置、胎土は次の通り。1:A室出土、Nile B2、2:A室出土、Nile B2、3:A室及びB室、地上 3E06c、シャフト 127 シャフト部から出土した断片が接合、Nile B2、4:A室、Nile C、5:A室、Nile B2、6:B室シャフト 127 シャフト部から出土した断片が接合、Nile D、7:A室、Nile B2、8:シャフト部、A室、B室出土の断片が接合、Nile B2、9:A室、Nile B2、10:A室、B室から出土した断片が接合、Nile B2、11:A室、B室から出土した断片が接合、Nile B2、12:B室、Nile B2、13:B室、Nile B2、14:A室、Nile B2、15:B室、Nile B2、16:B室、Nile B2。図19に掲載された土器の出土位置、胎土は次の通り。1:A室及びB室、地上部 3E06a より出土した断片が接合、Nile D、2:B室、シャフト 127 シャフト部から出土した土器が接合、胎土不明、3:B室、Nile B2、4:シャフト部、A室、シャフト 127 シャフト部から出土した断片が接合、Nile B2、5:A室、Nile B2、6:A室、Nile B2、7:A室及びB室から出土した断片が接合、Nile B2、8:A室及びB室から出土した断片が接合、Nile B2、9:A室及びB室から出土した断片が接合、Nile D。
- 9) 第20王朝では、青色彩文が施される器形は碗形が一般的になる (Aston 1998: 354)。
- 10) 例として、第6次調査シャフト 28 (吉村他 2002: 51)、第8次調査シャフト 34 (吉村他 2003: 167) が挙げられる。
- 11) 例として、ウイアイの埋葬 (吉村他 2010: 22, 図7, 23)、チャイの埋葬 (吉村他 2010: 39-40, 写真13, 14)、シャフト 84 (吉村他 2013: 17-21)、シャフト 88 (吉村、近藤、長谷川他 2011: 46-57) などが挙げられる。

参考文献

Arnold, Do

1988 “Pottery”, in Arnold, Di., *The South Cemeteries of Lisht, Vol.I: The Pyramid of Senwosret I*, New York:, 106-149.

Aston, B.

2011 “Chapter VI The Pottery”, in Raven, M. J., Verschoor, V., Vugts, M. and Walsem, v. R., *The Memphite tomb of Horemheb V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*, Turnhout, pp.191-303.

2012 “The Pottery,” in Schneider, H., *The Tomb of Iniuia in the New Kingdom Necropolis of Memphis at Saqqara*, Turnhout, pp.139-217.

Aston, D

1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. - TEIL 1 : Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.

Baba, M

2014 “Intact Middle Kingdom Burial of Senu found at Dahshur North”, in Kondo, J. (ed.), *Quest for the Dream of the Pharaohs: Studies in Honour of Sakuji Yoshimura*, Cairo, pp.35-48.

Baba, M. and Yazawa, K.

2015 “Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom shaft-tombs in Dahshur North”, in: Grajetzki, W., Miniaci, G., (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt, Middle Kingdom Studies 1*, London, 1-24.

Baba, M. and Yoshimura, S.

2010 “Dahshur North : Intact Middle and New Kingdom Coffins”, *Egyptian Archaeology* 37 (Autumn), pp.9-12.

- 2011 “Ritual Activities in Middle Kingdom Egypt: A View from Intact Tombs Discovered at Dahshur North”, Bárta, M., Coppens, F., Krejci, J., eds., *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, vol.1, Prague, 158-170.
- Brunton, G. and Engelbach, R.
1927 *Gurob*, London.
- Holthoer, R.
1977 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Pottery, Scandinavian Joint Expedition to Sudanese Nubia* Vol.5:1, Stockholm.
- Martin, G. T.
1989 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tut'ankhamūn I: The Reliefs, Inscriptions, and Commentary*, London.
- Niwinski, A.
1988 *21st Dynasty coffins from Thebes: Chronological and typological studies*, Mainz am Rhein.
- Nordström, H.A. and Bourriau, J.
1993 “Ceramic Technology: Clay and Fabrics,” in Arnold, Do. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz, pp.143-190.
- Raven, M. J.
1991 *The Tomb of Iurudef: a Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, Leiden and London.
2001 *The Tomb of Maya and Meryt II: Objects and Skeletal Remains*, Leiden and London.
- Raven, M. J., Verschoor, V., Vugts, M. and Walsem, v. R.
2011 *The Memphite tomb of Horemheb V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*, Turnhout.
- Schiestl, R. and Seiler, A.
2012 *Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom Vol.I: The Corpus Volume*, Vienna.
- Schneider, H. D.
1977 *Shabti : an introduction to the history of ancient Egyptian funerary statuettes, with a catalogue of the collection of Shabtis in the National Museum of Antiquities at Leiden*, I-III, Leiden.
- Yoshimura, S., Kondo, J., Hasegawa, S., Nakawaga, T. and Nishimoto, S.
2001 “Preliminary Report of Excavations at Dahshur North, Egypt -7th Field Season, 2001-,” *The Journal of Egyptian Studies* 9, pp.5-20.
- Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Takenouchi, K. Shuhei, M. and Yamazaki, S.
2016 “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-third Season, 2015”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 3, pp. 3-19.
- Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Takenouchi, K. and Yamazaki, S.
2016 “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-second Season, 2015”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 1, pp. 3-22.
- 矢澤 健、吉村作治
2016 「エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について—遺構の形状・規模・分布の分析—」、『オリエント』第58巻第2号、pp.196-210.
- 吉村作治
2011 「Ⅰ. はじめに」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.9-14.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一
2002 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—2000年 第6次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第14巻第1号、pp.49-60.
2003 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—2002年 第8次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第16巻第1号、pp.165-177.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子
2011 「Ⅱ. 第14次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-60.
- 吉村作治、近藤二郎、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子
2011 「Ⅲ. 第15次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.61-83.

吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、西本真一、柏木裕之、矢澤 健

2010「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告―第12次・第13次発掘調査―」、『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-46.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、竹野内恵太、山崎世理愛

2016「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告―第22次調査―」、『エジプト学研究』第22号、早稲田大学エジプト学会、pp.91-112.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、馬場匡浩、西本真一、柏木裕之、秋山淑子

2012「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第16次・第17次発掘調査―」、『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.21-67.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、西本真一

2013「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第18次発掘調査―」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-43.

2014「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第19次発掘調査―」、『エジプト学研究』第20号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-43.

早稲田大学エジプト学研究所 編

2003『ダハシュール北〔I〕―宇宙考古学からの出発―』、Akht Press.